



# 東九州支部報



韓国山岳会蔚山支部会との交流登山会 (5月16日・涌蓋山頂にて)

五月一五日午後、韓国の仲間は貸し切りバスで福岡から大分県入りし、筋湯温泉・八丁原ヴェーホテルに東九州支部員らが待つ中、定刻より少し遅れて到着。午後六時から懇親会が開かれた。参加者は東九州支部が会員・会友三十二名、蔚山支部が二十九名であった。開会に先立ち、昨年訪韓したメンバーを代表して、甲斐一郎団長がお礼のことはを申し述べ、続いて梅木秀徳支部長が歓迎の挨拶を行った。このあと、蔚山支部の具支部長が挨拶を行い、参加者の内の最長老である、安藤幹会員(支部監事)の発声で乾杯を行った。宴会並びに懇親会は加藤英彦会員(支部委員)の司会進行で行われ、ステージでは双方から両国の歌や踊りなどの出し物が披露され

た。その交流会の場で、今後は毎年相互に登山隊を派遣して交流登山で親睦を深めようということとなり、翌年初回の交流登山を、韓国蔚山支部員らを九重山系に迎えて実施、昨年は当支部が蔚山市を訪問し、嶺南アルプスで実施、三回めの今年は蔚山支部が大分訪問であった。

## 今年は蔚山支部が大分を訪問

## 韓国山岳会との交流登山

### 《 も く じ 》

|                |    |
|----------------|----|
| 韓国山岳会と交流登山     | 1  |
| 尻付山・中山仙境       | 4  |
| 長峰・赤松山ほか       | 5  |
| 鬼下駄・屋根の上       | 6  |
| 桂木山・東西鳳翻山・荒滝山  | 7  |
| 先達を語る⑥「武井栄四郎氏」 | 8  |
| マッキンレー山行報告③    | 9  |
| 嗚呼7年山②         | 10 |
| クラブ紹介⑧「白杵市山岳会」 | 11 |
| 津原の三角点(西部)     | 12 |
| 私の無名山ガイドブック 34 | 13 |
| お知らせ           | 14 |
| 後記             | 15 |



日韓友好懇親会（5月15日）筋湯温泉「八丁原ヴェユホテル」

# 交流山行報告

加藤 英彦

## 涌蓋山から一目山

五月十六日（金）

朝七時よりの食事を済ませて出発の準備を終え、ホテル前に集まる。今日の下山場所の一目山の登り口に二台の車を置き、車四台と貸し切りバスにて出発。涌蓋山の地蔵原登山口にて路上の広いところに四台駐車。バスはホテルへ帰す。

登山口にて準備体操を済ませて登りはじめる。四十八人の集団となり、長い列ができる。新緑の中、林道を終えて細い登山道へと入る。快調なペースで登っていく。何よりも好天なのが良い。

「ひとりしずか」の花が静かに一行を迎えてくれる。二回目の小休止は林道と出会ったところだ。

ここから本格的登りとなるも、ペースはおとろえることなく一定に保って全員がついてくる。樹間から下の風景が見おろせるようになってくるも、遠方になるにしたがってもやっつけているようで、晴れてはいるが見通しがきかないといった気象状況だ。

涌蓋山頂には九時五〇分に着く。ここで大休止。皆九重の山々を見わたしながら感嘆の声をあげる。後続の東九州支部員が全員登りつ

いたところで、日韓全員で一回目の記念撮影だ。写真撮影は、山頂標識をバックに、いろいろな組み合わせで撮り続けられている。母国韓国の方向はあちらの方になると教えてあげると、リーダー具さんが、昨日配った地図を見ながら今どのあたりかと尋ねてくる。丁寧に現在地を地図で確認し、次の目的地までのコースと時間を説明すると納得する。今日最後の目的地、一目山を指しながら地図との確認作業だ。

咲いている花の名前も指しながら教えてあげると、日本語の名前なので、言ってもその場だけのもので、覚えていくのはわからない。韓国にも似た花があるのかどうかも、会話が成り立たないのでよくわからない。

再出発して下っていくと、雌岳を過ぎたところで、ひぜん湯コースを登ってきた甲斐（一）さんと首藤さんに出会う。二人はここから山頂へは登らずに、皆と一緒に歩く。

涌蓋越を過ぎ、樹林を抜け、柵を越して草原に入って、みそこぶしののぼりにさしかかる手前の草原にて昼食をとる。韓国の人もそれぞれグループごとに輪になって弁当を開いている。

約五〇分間の休憩の後再出発。韓国のメンバーには若い人も多くいて、追いかけてくる元気者もいる。『みそこぶし』の頂上にて甲斐（良）さんが名前の由来を

るなど、賑やかに盛り上がった。翌日からの交流登山会は、初日は涌蓋山から一目山への縦走、二日目は黒岳で、二日間とも好天に恵まれて楽しく、意義ある交流登山会となった。

（文責 K・I）



(一目山山頂にて)



で見える涌蓋山の方を見ながら歓声を上げています。ここで今日二度目の日韓全員揃っての記念撮影。今日の山はこまでだ。バスに迎えの連絡をして下山開始。下りついた時にはもうバスが来ていた。自家用車の運転組は、今朝回していた車にて地蔵原に車の回収に行き、今日の行動を終える。

コースタイム：地蔵原登山口発七五六〜林道との出会い八四五〜涌蓋山頂着九五〇〜発一〇三〇〜草原にて昼食タイム一一二〇〜一二〇〇〜ミソコブシ山一二二一〜一目山一三二二九〜下山口一三三五〇

参加者：甲斐(二)、加藤、飯田(夫妻)、下川(夫妻)、西、阿南、中野、久保、興田、後藤、石川、首藤、甲斐(良)、園田、佐藤(秀)、土居、石神

### 黒岳へ

五月十六日(土)

説明しているが、ガイドの通訳でそれが正確に伝わったかどうか分からない。草原状の斜面に網の目のようについている「牛みち」についても、どのように訳されて伝わっているのかよく分からない。それにしても、この草原を歩くことで、九重の山の魅力が韓国の山の仲間にとのくらい伝わったことだろうか？

一目山の最後の急登も、皆元気でなんなく登り終え、遠くかすんで見える涌蓋山の方を見ながら歓声を上げています。ここで今日二度目の日韓全員揃っての記念撮影。今日の山はこまでだ。バスに迎えの連絡をして下山開始。下りついた時にはもうバスが来ていた。自家用車の運転組は、今朝回していた車にて地蔵原に車の回収に行き、今日の行動を終える。

男池園地清掃料一〇〇円を人数分払い、ゲートに入る。男池で湧き水の説明。みな徐々に水を汲んで味わっている。登りにかかり、かくし水にて最後の水場の説明をする。喉を潤す者、中には水筒の水を入れ替える者もいる。去年の嶺南アルプス霊鷲山からの下り道で飲んだ水場を思い出す。

木漏れ日の中、快調な登りが続くと、ソババツケで小休止。オクゼリに近づくと左手にはシヤクナゲが見え始める。今は盛りと咲いたシヤクナゲが一行を歓迎してくれているようだ。

風穴にて休憩。風穴の説明をする。何人かが入っていく。入り口のすぐ下にはまだ氷が残っているのが見える。支部員うちの数名



(天狗の頂上にて)

がここで分かれることになるので、あいさつを交わす。ここからの急登も隊列を乱さずについでくる。落ちやすい小石まじりのルートだが、平気で登って行く。天狗に向かう際には最後の方で遅れた組も何人かいたようだが、全員天狗の上に立つ。岩の上の絶景にはみな感嘆の声がある。ここで昼食を取る。そして、全員記念撮影をして高塚へと向かう。

高塚の山頂はせまく、他の登山者も多くいるのでやむなく通過し、先を急ぐ。上台よりの急な下りにも遅れる者はなく、列は進み、前岳の手前のアップダウンの繰り返しも皆、へばることなく元気でいる。

前岳山頂にて小休止。ここから最後の下りにかかる。さすがに、この下りには若いガイドが少し膝にきたようだ。白水への下りの最後のところでは、休止のたびに膝に持参のスプレーをかけ、痛そうにしていたがそれでも遅れることもなく、全員無事に白水鉱泉へ下りつく。そこにはもうバスも待っている。

東九州支部員の中にはやや遅れて下ってきた者もいたが、全員が揃ったところで『お別れ会』の行事となる。お互いの会旗に参加者全員がサインをして、会旗を交換する。団長の甲斐(一)さん、二日間の先導をした加藤よりそれぞれ感想を述べ、菅さんの音頭で『バンザイ』をし、韓国側の具支

部長がお礼のあいさつをして終了。蔚山支部員を乗せたバスが別府へ向かうのを見送って、今回の行事の全てを無事終えたことになる。

(白水でのお別れ会)



コースタイム：男池駐車場発八二一〜男池八二二〜かくし水八二四〜ソババツケ九一八〜風穴一〇二四〜シヤクナゲ園一〇二五八〜天狗着一一三〇(昼食)〜発一二二五〜高塚一二二五〇〜上台一三二八〜前岳の手前一三二五〇〜前岳着一四三〇〜発一四四〇〜展望台一五二六〜白水着一六〇五

参加者：加藤、阿南、菅、中野、久保、下川(夫妻)、渡部、石川、石神

(風穴まで) 甲斐(一)、飯田(夫妻)、甲斐(良)、野村、西、小竹

### 講評

今回は三つのことで最高でした。

(一) 好天に恵まれたこと

五月のこの時期での好天は予想されていたが、三日間の最高の天気は恵まれていた。先週の雨の日曜日のことを思えば、好天が何よりで、選んだ時期が良かったということだ。

(二) コース選定が良かった

二年前の交流会では久住山と大船山に登ったので、今回はそれらをさけて涌蓋山、黒岳を選んでみた。涌蓋山の草原状の山、そして対照的な原生林に囲まれた黒岳と二ツの山で九重の山の良さを少しでも感じたことでしょう。そしてこの時期、色々の花や「ホトトギス」「カツコウ」などの鳥達が歓迎してくれた。「ヒトリシズカ」「アセビ」「リンドウ」「ミツバツツジ」「ドウダンツツジ」「キスマイレ」等々色とりどりの花を楽しんだことでしょう。

(三) メンバーの選定(メンバーに恵まれた)

三〇名の大部隊で心配したが、全員よくついてきた。二五分三〇分に五分の休憩というペースで歩いたが、一人のバテる者もなく計画どおりのコースを歩けた。特に山には素人みたいな若いガイドも黒岳の縦走コースを遅れることなくついてきたのには感心した。

むしろ、我支部の方が遅れるのではないかと心配したが、これも何とか全員歩くことが出来た。

交流登山も三回目となったが、今回二日間ではあったが十分交流出来たと思っている。ただ、もっと言葉が通じあえばまだより交流が出来たのだと思っている。

来年はまた、こちらから出かける順番になるので、行ける人は是非参加して欲しいと思っている。

## 月例山行報告

尻付山 587.4m.

## 中山仙境

(四月月例山行)

### 岐部 威吉

青葉台のバス停で五分ほど待っていたら、五時三〇分、久保さんが車で迎えに来た。何時も有り難いことである。次は城南団地で下川宅へ向かう。そして、同氏を乗せてサニーに向かう。

六時前に着くともう中野さん、牧野さん、今山さんが着いていた。中野さんと久保さんの車に分乗し、途中、石川さんのアパートにより彼を乗せて別府へ。別府では市立

美術館前で待ち合わせの飯田さんと合流。二台の車は一路西国東へ。途中で例によってコンビニで食料を買って進む。

次の待ち合わせ場所は真玉温泉センターだ。ここでは宮本さん、土居さん、それに今日初顔の近藤さんが待っていた。今日は総勢十三名で、けっこう賑やかになった。まずは今日の目的の山へ。十九年度の支部の月例山行テーマは『富士のつく山に登ろう』で、その最後の今月は『真玉富士』こと、尻付山だ。この山は、旧真玉町と、旧香々地町の境にあり、おむすびのような山容をしている。登るルートは上黒土から林道を車で上り、林道終点から山頂を目ざすこととなった。(この山には、西狩場と(尻付山頂にて))

鞍部に登り、山頂に至る古くからの道があるが、今回は楽な林道コースを選んだ) 車をおりて、先ず準備体操をして出発に備える。みんな元気で、張り切っているのが伝わってくる。林道終点から林の中のをジグザグに登っていく。約三十分の登りで、八時ちょうど、山頂に到着。

山頂は広々とした台地のように平ら、その中央に三等三角点がある。展望も良く、西には猪群山、東は両子山を中心とした国東半島中心部の山々が、そして南東の彼方には由布、鶴見山群、南は田原山から華ヶ岳、津波戸山、御許山などが望まれる。

周囲をよく見ると、広場の縁にはワラビがたくさん生えていて、疲れも忘れてワラビ狩りに励む姿があちこちに。

下りは二十分ほどで林道の駐車場へ。そして次の目的地、夷耶馬溪の中山仙境登山口に向かう。

中山仙境は南北2km、東西1.5kmにわたり奇岩奇峰が連なり、夷耶馬溪といわれるこの夷谷の音つとも優れた景色をなしている。

午前十時に北東の端の前田登山口を出発。良く整備された登山道が、曲がりくねった岩の稜線に続いている。階段、石段、クサリなどが次々と現れ、また、至る所に石の仏様がおかれている。木立が途絶えるごとに岩の上から見える展望は素晴らしい。また林の中では時折り色鮮やかなヤブ椿などが

疲れを忘れさせてくれる。登山口から約一時間、無明橋に到着。幅が四〇cmほどの石の橋は両側は絶壁で、スリル満点。目がくらむ。高所恐怖症の人は渡れないだろう。まるで修験者にもなったような気分が橋を渡る。



(無明端)

そのあとも岩の上の稜線道は続く。延々と続く奇岩の上の道は、さながら万里の長城だ。里の方から聞こえる十二時のチャイムの音を聞きながら、最後の岩稜登りで最高峰の高城に着いた。

三二六.九m、四等三角点があり、脇には石の祠と天照皇大神の石碑がある。登山者が次々と来て、狭い山頂は記念写真の撮影がやっとなだ。それでも恒例の「パンザイ」と「ヤブホー」をやって先に進む。稜線の岩峰を巻いて下りにかかる。



小河内の双方からハジカミ山との



(中山仙境・高城にて)

断崖の中腹をへつるよう巻いて下ったり、洞窟の祠という岩屋の杜前を通ったりして、深い谷間の道を下るとようやく広い県道に出た。ここに置いてあつた車に分乗して河川プール登山口に移動。そして、ここにある休憩所の中で昼食タイム。

今日は石川さんの持参の猪肉と、自分は仕事で来れないのに準備しておいたさつたという、遠江さん調達の野菜や団子汁の団子、その他の具で美味しい猪鍋だ。二つの鍋を囲んで十三名がみんな舌つづみをうつ。こうして美味しい料理を囲んで、山の仲間同士で面白い言いながら食べる食事は格別だ。石川さん、遠江さん、有り難うございました。

予定では、もう一つの都甲富士(屋山)にも登ることになっていましたが、時間も下がったので取りや

めにし、真玉温泉で汗を洗い流してここで解散となった。

今日は天気にも恵まれて、スリルもあり、大変印象に残る山旅となったと思う。十三名の修験者はそれぞれ満足そうな顔で家路にいった。

参加者：飯田、石川、今山、岐部、久保、近藤、下川、土居、中野、長野、西、牧野、宮本

### 隠れ洞



## 長峰(501.5m)・赤松山(501.0m)ほか (五月月例山行)

牧野信江

今年(二〇年度)の月例山行のテーマは『月の高さの山に登ろう(二〇〇単位)』(なるべく今ままで登ったことのないところへ)ということ。初回の五月は五〇〇mの高さの山だ。

五月二十五日(日)午前五時サニ一出発。犬飼から三重町を経て日向街道(国道三二六号)を南下し、右に行けば杉ヶ越に行くあたりで左に、大規模林道に入る。さらに細い道に入り、いくつもの分岐を通過して進むが、乗せてもらっているの、道はよくおぼえていない。

六時四〇分、稜線に上がり出たところで車から降りて、今日最初の山、長峰へと向かう。稜線直下を通る、ほとんど水平の林道を歩いていくと、左手は広々と展望が開けていて、遠く桑原山から傾山にかけての稜線が、雨上がりの雲にかすんできれい。

林道入り口から一〇分ほどで、右上上の稜線に上がり、尾根伝いに登っていく。右手がスキの植林地で、シカ避けのネット伝いに進むと、ネットに頭蓋骨つきのシカの角が絡まっていた。残酷なネットだ。

七時二十五分、長峰に到着。五〇一・五m、三等三角点があった。近くに巣があるのか、すぐ頭上の上の木の上でとんびがしきりに鳴いていた。

(長峰山頂にて)



車まで帰ると次は、少し南にある、割子谷という三角点を目指すこととなった。黒土峠の少し先から谷沿いにスキの植林地に入り、あとは稜線に登って、登り初めて約四十分、八時五十分到着。五八〇・九m、四等三角点があった。

ヒノキの植林の間に、ユズリハという、葉の大きな低木が多く見られた。

次は今日二番目の目的地である赤松山へ。地図では北の赤松峠からの道があるが、長峰の登り口から少し下ったところにある、広い林道の交差点から東に、荒れた林道を車が終点まで乗り込んでくれた。

林道終点からすぐ上の稜線に登り、後は稜線伝いに照葉樹林の中の歩きやすい尾根道が続く。約四十分で十時三十分山頂到着。五〇一・〇m、三等三角点があった。

(赤松山頂にて)



次ぎに目ざしたのが大河内山。この山は赤松山への林道のほぼ中間点の、林道からわずか数分登ったところにあった。一時一五分到着である。狭い山頂四四〇・七m、に四等三角点があった。

このあと林道の交差点に引き返し、そのすぐ上の見晴らしの良い小高い草の広場で、シートを広げて皆で輪になって昼食だ。石川さんがウイスキー入りのコーヒをつくってくれた。

今日五番目に目ざすことになったのが『登力』という三角点。林

道交差点から谷間の道に戻り、途中から古い林道に入って、さらに荒れた急な作業道を登る。やがて道はなくなり、そのままGPSを頼りにヤブをこいで前進すると、平らな山頂に着いた。一時十五分着、約三十分の登りであった。313.3m、四等三角点があった。

飯田さんが十六谷の『点の記』というのを見せてくれた。三角点を埋設した時に残した記録だそうである。

今日は二回、茶色の長い尾をした山鳥が、道を歩いているのを見た。それから、今回の山は、赤いテープが着いているところがあり、こういう地味な山にも登る人はいらんだということが分かった。

一日中五月晴れの良い天気。今日も楽しい山登りであった。

二万五千分の一地図：重岡 参加者：飯田、石川、岐部、久保、中野、西、牧野



石川さんが三角点のまわりをナタで刈り払った。林道に下ったところでヤマヒルがいるのを見つけた。このあたりはヤマヒルが多いとのことだ。

今日の最後、六番目に目ざしたのが登力の西にある『十六谷』という三角点だ。蔵小野というところから、北川ダムの上流を橋を渡り、車道から別れ、谷に沿って入っている古い荒れた林道を登る。林道はすぐになくなるが谷沿い登り、次ぎに稜線に向かって斜面を

## 鬼下駄(602.8m)、屋根の上(674.4m)

(六月月例山行)

佐藤 秀 二

昨年の自滅事故以来、久々の月例山行への参加だ。前日(六月二〇日)より日田に来て、夜は野営を楽しんで山行に備えるという計

画があったようで、大分から来るメンバーは張り切っていたようだ。二〇日はあいにく、大雨注意報発令。日田地方は昼頃から大変な雷雨で、前日昼前にその行動は中止となった。

当日は、大分組はいつもの様に、午前五時にサニーを出発となった。こちらは、上津江からだけどほば同時刻に家を出た。六時過ぎに日田市街地はずれのスーパー林道入り口で待ち合わせをし、石井小学校付近で合流した。

そのまま道を奥へと進む。今日の最初の目的地は鬼下駄(602.8m)。この無名の変な名前前の山は今年の山行テーマ『月の高さの山』の六月二六〇〇mにちなんだから少し上ったところから左に別れる林道へ入った。



(鬼下駄山頂にて)

ここで車を断念。道脇に駐車し、おり三角点が見あたらない。皆で山頂付近をあちこち探し、ようやく山が雲の間に見え、山頂に向かって続く作業道らしきものが見えた。「あの山?と期待と不安に駆られながらすすむと、やはり作業道が続いている。しかし最初に入った作業道は、人の背丈以上の猛烈なカヤのブッシュが行くのを阻む。進むことを断念し、別の作業道を探す。何本か作業道があるようだが、探すうちにブッシュの浅い登りやすそうな道があったのでそこから登る。幸いにこの道はほとんどカヤもなく、歩きやすい。

の山とは反対方向に谷に向かって等高線に沿うように歩く。林道が切れ、やや登りながら五分ほど進むと谷に出る。ここで反転し、植林の中を進む。植林の中とはいえず若齢の植林で、下草狩りをしているため猛烈なブッシュ。早朝の雨で露がたっぷり含まれており、雨具を着ていなかった私は、びしょ濡れになって藪をかき分け進んだ。

途中で尾根に上がる組と、そのまま進む組と二手に分かれて進み、山頂手前の鞍部で合流。思いの外時間がかかってしまった。そこからは尾根を伝って山頂へ。鞍部からは大した藪もなくすんなりと山頂へ着いた。



(「屋根の上」にて)

頂上は自然林の中で展望は全くなく薄暗い。三角点は枯れ木に隠

れ、先ほど同様に三角点周辺を清掃。ここも誰も登山者が来ていないようである。三角点は美しく、設置されたままの状態であった。そしてこの山の名前「屋根の上」に驚きながら、「子供の頃はよく屋根の上に登ったなあ」等と談笑しつつ、パンザイと記念撮影。少しの休憩の後下山。再び藪の中を通過して車に戻った。

もう一つ行こうと、日田市内に

向けて戻りながら林道入口を探すが、よくわからず、地図で探しているうちに雨が降り出した。仕方なく昼食にしようとして、近くにあった野球場の屋根行きスタンドで雨宿りをしながら昼食。

食事をしていると、雨はだんだん本降りとなりついに雷も鳴り出した。激しい雷鳴と驟雨にすっかり戦意喪失した一同・・・今日



桂木山の妙見社

参

加者：飯田、石川、岐部、久保、佐藤、中野、西

## 桂木山・西風 山・東風 山・荒滝山

(七月月例山行)

安部可人

今月(七月)の山は七〇〇mの山。行き先は山口県。七月十二日(土)四時〇八分、一足早く古国府自宅発。六時三十分小倉東ICに着。五十分待たず定時出発の後発組は来ない。待ちわびてICを入り九州道を山口に向けてゆっくりに走る。小倉北IC付近で中野車(同乗者：西、飯田、宮本、遠江)が追いつく。二台合流して美祿ICで一般道へ。(八時二十分) 県道三六を北上し、美祿市の外れ、白糸の滝コースの登山口に到着。霧沢に施工されたまだ新しい砂防ダムとその周辺工事。ダムを右手に見ながらコンクリート舗装の林道を四〇〇m、五分歩く。

地形図にある小屋の前を通過、すぐ先に二又。古い板の案内標識に従って右へ入る。クヌギの大木の稚草ホダ木の並べられた中を、谷治いにほぼ水平に進む。スギの植林の中、谷治いに登っていくとやがて、五一九から南西に張り出す尾根の末端あたりで三本の沢が分岐する。その左の沢へ方向を変え、すぐ再び二〇〇度

方向へと登っていくと、沢沿いの本格的な登りとなる。赤テープなどなくても、ルートは明瞭。植林地の谷間から、やがて照葉樹の林にかわるといっそう急な登りとなり、ほどなく高度五六〇mの平らな小広場に到着。(二〇時一〇分)

ここは頂上から北東に派生する後線上の鞍部。一休みして出発。緩い登りから次第に急になり、最後はコンクリート梁木でつくられた階段がまっすぐに登っている。約一〇分間の急登。だがさほどきつくはない。三日前の長岩城址(弱山)と釣鐘山での練習の成果だ。

桂木山(七〇一、六m)一〇時四〇分到着。二等三角点がある薄曇りのなか、霧で遠景はもやもやで、西北西方向に昨年暮れに登った花尾山が、南東方向に遠く東・西風山山ぼんやりと見え、見えるはずの日本海はほとんど判然としない。大内家の守護の二基の妙見



(桂木山頂にて)

社は立派な石組みだ。無風、二八度、蒸し暑い中の下山路は長く感じる。西さん不機嫌。一二時〇〇分ちょうど下山。遠江さん持参の恒例の冷やしソーメンを皆で頂く。一人分茹でてきたと、腹一杯になってもまだ余った。

一二時五〇分出発。次の山に行く前にまずは今宵の食糧調達の方が大事と、一路山口市に向けて二台は運行。湯田温泉郊外の吉敷でスーパーマーケットを見つけ、停車。ここで今宵のすき焼き材料一式を購入。

地図を見たら、山頂付近まで車の通じている西風山を旨とし、県道四三五号から日道、大石峠、明敷峠とせまい峠道を通って、長小野で土地の老婆に道を教えられて油ノ峠へや々と到着。(四時五〇分六二〇m)



(西鳳翻山頂にて)

全面通行止めの標識を見ながら行けるところまで・・・と進むが、少し先でクサリ。その先が大

きく崩壊している。アンテナ管理道路は頂上まで続いている。

高度差一五〇m、直線距離四〇〇m、傾斜のきつい舗装道路を登る。約二五分間、再び大汗、大きく曲り迂回しながら車道はアンテナの林立する西鳳翻山頂に着く。七四一・九m、三等三角点はアンテナの間にある。

車に戻り、今宵の野営地を探して、明日の登山口となる坂堂峠に向かう。小吹峠への近道は、地図では細い山道となっているが、立派な二車線の道。

「21世紀の森夏木原キャンプ場」一六時〇〇分着。

ここは『吉田松陰記念』と銘うたれた少年のための野外施設。江戸送り、無実の罪人松陰が当地で何日か過ごした。

(注) 多分弟子たちと最後の別れをしたのだろう。あと五〇〇mも行けば国境なのだから。

施設内は閑散として人影はない。管理棟に交渉に行くとなつた一人若者がいて、「ここは少年を対象としたキャンプ場なのですが・・・」と言いながら「上に聞いてみます」との返事。どうやら設置者の県にお伺いするようだ。待つことしばし、大人も特別にOKとの許可

シリーズ

# 支部の先達と語る⑥

## 武井栄四郎氏

(1924～1976)

会員番号7768



## 追悼文

武井氏が阿蘇に逝って、すでに三年余になる。休日ごとに欠かすことなく九州の山を登り続けていた氏の面影が、いつまでも脳裏に焼き付いて離れない。

氏は特に阿蘇については隅々まで知りつくしていたし、阿蘇の山行には高度計とコンパスを忘れることがなかった。それは、近年変貌を続ける阿蘇外輪山の姿を嘆き、できるだけ正確に地図にとどめるためであり、「新しい阿蘇に関する一冊の本を出すのだ」と、地図作りのほか、登山コース、あるいは植物と、実に丹念な調査をしていた。その氏がまさに自分の庭のようにしていた阿蘇で遭難されたのである。それは、山仲間のだれもが想像しなかったことだった。ふるさとの山をこよなく愛した人。阿蘇でスズランを発見したと、少年のように喜んでいた氏。その誇らしい顔はすでにない。

武井氏の登山は、いわゆる派手なものではなかった。地道に、コツコツ歩くタイプの人で、常にすべてに慎重で、努力を積み重ねる人だった。そして、思い込んだら最後までやっけるという登山が信条だった。氏の登山は昭和一八年頃から始まり、九州の山が皮切りだった。戦後三〇年代に入ってから本格化し、中国、四国地方から、さらに南・北アルプス、真冬の富士など、ひたむきに山を求め歩き続けるようになった。

仕事の関係で、各地を転動して回った人でもあり、遭難当時は日本専売公社熊本地方局の経理部長の要職にあった。しかし、山での氏は、仕事を離れた一人の登山家として人々に接した。夏の幕営では、若者たちと酒をくみかわしながら、興いたればフンドシひとつで素足になり、大根踊りを一緒に踊ることもあった。いい親父さんぶりだった。

山を愛し、酒を愛し、ひたすら家族を愛した人。それは私にとっても忘れ得ぬひとであり、よき上司であり、かつ、よき友であった。今日も阿蘇の山々は悠然とそびえている。氏の御霊は草の波を渡り、雲となって山肌をいつくしみ、山鳥となってささやきかけていることであろう。(三重野)

が来た。



この若者すこぶる対応がよくて、さすがらしい印象。すぐに仲良しになった。大分から来たと知って驚いていた。大きなドームテント貸し切り。シャワー使用料込みで一人で五二〇円。

さっそく夕餉の準備。暑いのにすき焼きの宴会開始。たらふく食らい、久しぶりにホテルを見て、皆はテントへ、安部はサーフの中に就寝。(一〇時〇〇分)

七月一三日(日)  
二時過ぎに目が覚めてこの文を一時間書く。ご苦労様です。四時〇〇分西さんが窓を叩く。寝るひまなし。

五時二〇分、萩往還、坂堂峠の国境の碑のある駐車場より出発。今日も蒸し暑い。二五度、曇天(新型GPSは元気。すぐ起動)小ピークを二ツ登り越して旧坂堂峠、昔高杉晋作も歩いたところ。小さなアップダウンのあと、長い急な登り、二日酔いの二人にはきつい。ショウゲン山分岐六

時〇〇分着。休憩。

丸太敷きの階段遊歩道の上り下りだらけ、不快な縦走路。よくぞこんな山を新日本百名山に選んだものだと、岩崎さんの悪口を言う。別にナイスコースがあるんだらうか?季節も最悪。いくつピークを登り越しても頂上は近づかない。六時五〇分、六三〇mの鞍部着。(二ツ堂コース合流)樹林帯が終わり、展望が開ける。ここからは

ひと登りで頂上。

東鳳翻山着七時一五分。七三四、二m、三等三角点だが探せど不明。山頂標識の前に石柱があり、後から登ってきた男性曰く「何者かが三角点の頭部を破壊した」とのこと。四パーティの高校登山部員がいた。ポッカの練習のようだ。昔を思い出した。

(東鳳翻山頂にて)



月例の前二回の山口の山行はいずれも空気が澄んでいて、遠くまで素晴らしい展望を楽しんだが、今回は歓声があがるのがなかった。登山者は全部で一〇人足らずと、意外と静かな山頂だった。

七時五〇分、健脚の中野さんは車を回すために往路を坂堂峠まで引き返し、我々五人は一・三km、三〇分の地蔵峠へ向けて下山開始。こちらは単調な下りコース。霧囲気もなかなかよし。八時三〇分、地蔵峠へ到着。アスファルト車道

が横切っている。すぐに中野車が到着。

次は安部推薦の、帰り道にある宇部市の荒滝山(四五九m)へ。犬ガ迫登山口(高度二〇〇m)には立派なトイレ、駐車場。この山は大内氏の重臣であった内藤隆春の築いた荒滝山城の跡。一〇時四〇分出発。まだ荒れていない廃屋の前を通り、二つの赤い鳥居を通り。頂上近くには二つに割れた巨石や、天狗岩があつて稲荷社がある。急登を覚悟していたが、山城に食料、水などを搬入するのに最適なやさしい道、樹林の中の楽々コース。

一時二五分山頂到着。いかにも山城の跡を感じさせるような広い山頂。展望はよい。登りついたところに、集落を見下ろすように、地元の名士の立像があり、その後方には何と、高い基礎の上に明治



(荒滝山頂にて)

天皇の陶器製の台立像が・・・。

(この辺は昔は陶器の産地で相当栄えたのか、調べてみたいが無理でしょう)それにしても、史跡に大努力、大金を使ってこんなものをつくるとは・・・?そんな古きよき、元気な時代、なつかしくもある。

過疎の村、今はむなし。史跡も草の中。下山三〇分で、登山口着。これにて今回の山行は閉幕。あとは帰途へ。

参加者: 安部、飯田、遠江、中野、西、宮本

**マッキンレイ**  
(6194m)  
**山行報告③**

星子 貞夫

6月13日 停滞

晴

12時20分 591hp

予報によると高気圧到来とある。明日より3日間をアタックの日と決めて、今日は停滞し一日中食べて過ごす。

夕方より山頂方向は快晴となり

6月14日 晴

いよいよ今日からHCに上がり天気を確認して頂上にアタックをかけることになる。

ヘッド・ウォールの登りも二回目となりアッセンダーの使い方も慣れてきた。コルでデポした品物を回収して重くなったザックを担いで、ミックスの岩稜をアンザイルンしてゆっくりと登る。途中でのセンドーを使う。日の固定ザイルが一箇所ありアッセンダーを使う。から7時間で5250mのHCに着く。

HCは皿のような地形で東にデナリ・パスから続くマッキンレイ南峰の稜線が迫り、西はウエスト



(HC)

バットレスに向って開けている。



(HCテント)

BCと同じで此処にもレンジャーが駐留しており、アタックに行く人々のテント村となっている。1張たてる。ポツカの後のブロック作業は息が切れて苦しかった。2台焚いて水を作り各自持ち込んだ食事をする。明日好天ならば頂上アタックとなる。5人の高度順応状態を隊長がチェックする。SPOは隊長、T氏、私ともに75%、K氏、I氏65%、I氏は顔がパンパンにはれている。B氏も顔が多少はれているが、テントシューズをガスで焼いたりして判断力が鈍っている。結局I氏は明日下山する事になる。

6月15日〜16日BC泊

晴夕方から一時吹雪後曇

10時スタートでアタックとし

ては遅い出発であった。隊長、私、B氏の3人のオーダーでアンザイレンシ、デナリ・パスまで休憩なしで登る。ここで休憩し岩の隙間にピッケルをさし、ザックを確保して座り込み、唯ひたすら間食をとり水を飲む。突然背後から赤いザックが斜面を転がっていく。幸い15日位で止まった。B氏のザックである。隊長の確保でB氏自身が拾いに行く。この事でB氏は此処から下山することになる。高度障害で判断力が鈍っていたと思われる。B氏と分かれ隊長と二人で急な岩のあるリッジを登りフットボール・フィールドと呼ばれる広い雪原に出る。登頂を終えたパーティー教組とすれ違いながら黙々と歩く。この頃から東の空に気になる巻雲が現れる。これが後に災いの元となった。やがて正面に最後のピークが見えた。180mの登りである。ガスがかかり始めて雪がちらついて来た。一気に登ることは出来無い。複式呼吸の繰り返しで一步一步ゆっくり登って行くと突然雪面が平らになった、これで終わったのだ。もう登らなくていい。時刻20時0分である。ガスが舞って周囲が薄暗い白夜の山頂で安村氏が写真を撮る2枚撮って直ちに下山する。私も会旗を持って撮りたかったが、天候悪化を気にした隊長はゆるさなかった。この間1分位であった。帰路を急いで焦った安村氏が私



(山頂にて)

のザイルを強く引いた。バランスを失った私は斜面に転落するが滑落停止姿勢で止まった。体制を整えてさらに下る途中、再度滑落し二人とも50日程流された。滑落停止姿勢で止まったと思ったら、相手のザイルに引かれて又落ちる。3回目にリーダーの滑落停止動作をやつと止まる。あまりの息苦しさで失禁してしまふ。一時ビバークも考えたが、ザイルを引かないこと、ホワイト・アウトになった以上は焦らないでゆっくり行動する事を二人で話し合いい、一休みして水と間食をとり、コンテを止めてザイルいっぱい50日のスタカットで斜面を下る。地形を良く認識していた安村

氏のお陰で無事フットボール・フィールドに下る。ガスの間から指導のポールも見えてきたので時々「立ち休憩」をしながら7時間歩き続けて、6月16日3時にテントに帰着した。テントで我々の帰りを待っていたB氏、T氏の作ってしてくれた飲み物を飲んだ。生き返る心地であった。何を食べたか記憶にないがそのままシュラフに入って12時まで熟睡し、16時30分にテントを撤収してBCにくだる。6月17日 中間テント場泊

晴

5時に起床し下山の準備にかか

る。登頂時の疲労からか時々軽い胃の痛みを感じる。下りは登りよりソリの扱いが難しい。ソリが先に滑って行くからだ。前の人のソリを後ろの人が引く張ってブレーキをかけながら下る。つまり後ろの人は前のソリに引かれる要領で歩く。傾斜が急になると引かれる力も大きいのでこれまた厄介である。最後の人は二台のソリにブレーキを掛けることになる。これを電車ゴッコと呼んでいる。下山しながら次々と雪中にデポした装備、ゴミを撤収し荷物はますます膨れ上がっていく。3300mまで下った頃雪が降り出したので共同用の大テントを張って仮眠し翌日3時起床5時出発とする。6月18日 LP泊

雪のち雨

スタート時の雪が高度を下げる

(次号へつづく)

## 久保洋一

行きの途中、戸次のコンビニで朝食を買い、一路登山口へ。道の駅宇目（唄げんか橋の手前）でトイレ休憩をし、桑の原トンネルを出ると右折し、藤河内へ通ずる林道へ（左折しても藤河内にはいけないが現在通行止めとなっている。）ちょうど左折して藤河内に至るルートと右折して藤河内に至るルートで途中で合流しているところがある。そこから二〇〇mくらい進むと下山予定の林道への入り口がある。

その林道を二台で登り、舗装が途切れたあたりに私の車は駐車。中野さんの車で登山口の方へ移動。桑の原トンネルを出て右折して祝子川温泉に至る道路には「桑原山登山口」の小さな看板が二箇所ある。最初の登山口は黒内谷から県境の尾根づたいに桑原山に至るコースだ。次の登山口はやはり先程の黒内谷の少し上流から登り始めるのだが、矢立峠を経由して桑原山に至るコースだ。

今回は矢立峠経由のコースを選んだ。このコースも祝子川温泉に至る道路から脇道の林道がかなり伸びているが近年台風の影響で道が荒れてしまっていて現在はいま奥へは行けない。一、二kmも入ったところ、道路脇に少し広い

ところがあったので車はそこに止めた。

靴を履き替える、ヘッドライトをつけるなどの準備をし午前三時三十分出発。

月明かりでうっすら明るく、風もないのでそんなに寒くは感じない。林道に沿って登っていく。

振り返ってみると谷の下のほうに人家の明かりが見える。周りは暗いのでやはり一人では気持ちわるい。このルートで中野さんは以前登ったことがあるというのでここは中野さん

だよりだ。

かなり林道を進むと両サイドに植林があるところに入り林道が二手に分かれている、私の感じでは下の方の道かなと思うが、その林道は谷へ下っていつているようにも見える。わからないので一旦下の方に進んでみる。水が流れているところまでおりつくと、そこは台風のとときの濁流のはげしさを思わせるひどい荒れようだ。とても車なん

## 会員所属の山のクラブの紹介コーナー (No.8)

### 「白杵市山岳会」

#### 大串岳三

1976年（昭和51年）の大分県体育大会山岳競技参加のため、当時の白杵市役所職員を中心に選手が構成されました。県体参加だけでなく、周年の山行活動を希望した有志により、1977年（昭和52年）2月に白杵市山岳会として正式に発足し、これまで32年間活動を続けてきました。

2006年（平成18日）11月には、設立30周年を記念し、白杵市民に愛され、登られている鎮南山の清掃登山を行うとともに、祝賀会を開催しました。

名称 白杵市山岳会（大分県山岳連盟所属）

創立 1977年（昭和52年）2月

会長 高橋 正（初代）渡辺 渡（2代）

事務局 白杵市家野7組 大串岳三方

会員数 18名

基本理念 様々な山々を愛し、様々に楽しもう

活動の内容

1. 月一回の例会と会員参加の山行
2. 大分県山岳連盟の諸活動への参加
3. 大分県体育大会山岳競技選手への支援・指導
4. 地元の山々の登山道等の清掃・整備

当山岳会が発足して32年が過ぎてしまい、10前までは日本百名山・富士山・北アルプス・南アルプス・海外とエネルギーに頂上をめざし、また、市民登山教室等積極的な活動を続けてた会員も中高年になっております。

身体のおちこちが老化し、無理のきかない年齢となっていますが、それでも山への思いは断ち切れず、九州百名山、大分百山への挑戦、山野草の鑑賞、地元の山の清掃・整備と、個人個人が年齢や体力、技量に応じた登山を続けています。

若い世代の加入もなく、これからは限界集落ならぬ、限界山岳会になろうとしています。会員一人一人が元気に登山を続けている間は、白杵市山岳会の活動は継続していくと思っております。

付記

渡辺会長は80歳を過ぎた歳とはなりましたが、今でも元気に地元の鎮南山・姫岳などに登っては、季節や山野草を楽しんでおります。

で通れる状態ではない。

その箇所も乗り越えさらに先へ少し行ってみたが、中野さんはどうも違うみたいだという。「前に来たときはこのように下る部分はなかったように記憶している。」と言った。

周りの景色が真つ暗でよく見えないのでこういつたときは明るいときよりも判断材料が乏しい。引き返して、今度は上の林道を進んでみる。登りながら中野さんは

「この道が正しければ、一面伐採してある明るいところへ出るはずだけど」という。しばらく林の中を進んでいくと明るい(実際は薄暗いのだけど)ところへ出た。

「そうだ、こんな感じだった。たぶんこの道であつていいると思ふ。」と前に登つたときの記憶がよみがえつたように明るい声で言った。

まもなくして看板らしきものが見え、近づくにつれて見ると桑原山登山口と書いた看板だ。よかつた、よかつた正しかった。そこで小休憩をとつた。そして、いよいよ林道から分かれて登り始める。周りは伐採していて、暗いけれど谷の下のほうまでうつすら見下るせる。

かなり急な斜面だ。その斜面をトラバースしながら登っていく。ここは少し緊張するところだ。さらに進んでいくと谷との高低差がしだいになくなつてきた。一面伐採しているのどこを通つても登っていけそう。中野さんが「下

の谷の方を行く、それとも上へ行く？」と私に聞くので「上へ行きましょう。」と答え、二人で谷と分かれ上へ上がつて行つた。

途中大きな岩の絶壁があり、ますます進めないのだから上へ直登に近い形で登つた。すると先ほど分かれた林道へ再び出た。でも木を伐採しているの林道にいた

みも激しく、一部道の半分くらいは崩落していた。林道をさらに進んでいくと樹木の茂るところへ入り中野さんが前に来たときのことを思い出したよ

うだ。長野さん、安部先生とこの林道の法面を急勾配で上がつているところを入つていったというのだ。

二人で林道の法面にライトをあてながら先に進む。しばらく進むと確かに中野さんが言っているような登山道らしきものが法面を上がつていつている。そこを登ると

木に赤いテープが巻いてある。間違った道な感じがする。それから樹木の暗い中を三〇分も進んだらどう

か？途中一度休憩し、矢立峠に五時六分に到着した。これからの登りは地図で見たとおり相当な急登である。しかも直登だ。二、三箇所迷いそうなどこ

ろがあつたがテープ等を確認しながら登つていった。先頭は時々交代しながら登つていった。急な登りのためかなり汗ばんでくる。休憩のとき中野さんはセーターを脱いだ。私は襟もとのフアスナ

のほうに町のあたりがくつきり見える。三重あたりなのだろうか？ようやく桑原山の肩にたどりついたあたりでまわりがまったく見えなくなつた。ガスにつつまれてい

このあたりまで来ると日の出が近いのでまわりは少し明るくなつてきた。それでまわりの木々は白くなつてきたのに気づいた。うっすら雪が積もつてきているのだ。空

の雪もちらつき始めた。やっぱこのくらいの高になると随分気温も下がる。先ほどの急登であつたかかつたのは逆に、このあたりから少し勾配もゆるくなり、

気温も下がつてきたため中野さんが手の先が冷たいと言ひ出した。だいたひ感覚がなくなつてい

る。私がほつかいるを出しませようか？と言つて「そこまではない。」というのでそのまま登り続けた。すずたけが進路をふさいで

いる。かきわけると雪が体にかかると。首筋に入つてひんやりする。「ちよつと休憩しましょう」と

中野さん。そこで荷を降ろしバナナを分けてもらつて食べた。しばらくは休憩と寒くなる。中野さんは今度セーターを着て出発した。もう少しで山頂に着くはずだ。だ

けど肩のあたりからの登山道は道はそれとわかるが雪や風が強くて荒れてしまつてい

る。そこをかきわけ進むのだからフリースの上着が雪だらけになる。雪山用の服装ではないので移動

しているときはいいが、とまると

寒い。いくつか小さいピークらしきものを越えようやく県境尾根からのコースと合流した。ここからは道がしつかりしている。あたりはずつかり明るくなつた。もうすぐ七時、日の出が近い。やつと桑原山山頂に七時二一分到着。

(次号へつづく)

## 野津原の三角点のある山(西半分)

安部可人、石川洋祐

御座ヶ岳 796.6 別にな

黒岩 636.0 御座ヶ岳登山口から東2km、右に赤テープあり。短いのが惜しい尾根200m、7分。安武柱と四等三角点静

かなり。大峠 682.8 峠の西、600m、水場から入り鉄塔横に駐車。八分散歩、「氏が切り開いていて容易に安武柱と三等三角点見ゆ、独り。

朝海 486.2 右の家の前、500m悪林道、駐車。更に2kmいくと広場、SSの指示あり、とりついて三分、何も無い四等三角点。山峰 370.1 左に鳥居、

廃屋の前を365、楽しい遠足道。広い尾根に入るとすぐ終点、二五分。ちよど三角点があつたところから北へ大崩壊。

日方 550.6 羽原から旧道に入ると三軒目の家。神木の標識、駐車。植林の広い尾根から少し左へ、軽いヤブ、境の歩きやすいところを南に行く。徐々に西南

西に方向を変え、再び植林、スキ一場からの尾根と合流、右へ五分、六〇分で四等三角点着。603まで二〇分。

羽原 312.2 羽原集落の地図の四つの黒点、豚舎の跡？何もない。その先左へ。小さな丘の墓地の中に四等三角点。西下に新設道路。

入蔵 241.1 野津原の入りを左折、吉熊の手前の橋渡らず、浅内林道に入る。高度計約250の地点。数年前、大崩壊跡の空き地に駐車。上(南)から120mぐらい林道と平行、やや下り

気味、珍しくテープが案内。標識のない四等三角点。入蔵も仮称。長の谷 250.7 原村へ左折、金比羅橋、ダム移転住宅(豪邸)、入り口ごみ置き場駐車。ク

ヌギ林、植林からヤブ山練習むぎの自然林を南、結構長く感じたがやはり五五分。何も無い四等三角点。今日も紙に山名を書いて写真を撮る。下り二五分。独り。

矢ノ原 219.7 矢ノ原郵便局前に入る。ツツジの石段、てつべんに立派な忠魂碑(陸軍中將南次郎謹書)戦死者名なく寄付者

だけ。馬鹿な！石碑の横に四等三角点。九〇歳になったら又きてもよい、三六〇度の大展望。独り。

上の原 215.6 竹の内の目前、台地の山。岩下入り口から最初の林道、右上に駐車。横の石段から北へ一二分。安武柱と四等三角点。独り。

塚野 260.2 塚野集落、運動場、神社、展望台まで2kmの標識から入る。曲輪の跡・岩に好適。やや荒れ遊歩道。道わき2m、左横、クヌギの陰に隠れて四等三角点。見逃して四〇〇mまで行った人がいます。高度計に注意。独り。

(その他)  
安友 109.8 安友集落の中、五分歩いて神社。二つめの高圧塔、二〇mさき、右クヌギの木車輪が当たったのか、倒れかかった四等。独り。

周ヶ瀬 184.7 太田、土取、右側の瀬戸の惚れ地藏の広場、駐車。一〇〇mもどり、一軒家、四国霊場七六番、佐藤家の墓、水路を東へ一〇〇m、右手に二〇mすこい竹やぶ、Nさんに感謝、切り開いてくれた。貧弱な四等三角点あるゆえに、馬鹿なお遊び。

本福宗 247.2 地図の里道は墓、牛舎、右に鉄条網、その中、三mのところ、四等があるではないか。N氏のおかげ。五度訪問した閑人がいる。

籠ノ台 240.3 集落の東端、高台の森、やぶ。墓の左奥の竹やぶに四等。調査に来たのを見

た人が教えてくれた。

愛宕山 104.9 苦戦。新鮮市場より入る。一〇分、九〇mの台地全体猛烈な小竹やぶ、八景一位愛宕山公園(昭和二十七年の碑)。墓石、廃墟。GPS近し、暑い、ハチの音、ナタなし、三分で退散。後日、東の団地(タンクあり)から、楽々、すぐに安武注と四等あり。独り。

辻原 152.0 直線道路の上(峠)左に駐車。左の一軒家、許可を得る。墓と廃墟の農機あたりを指示。分ならず、畑の人を待つが一番。独り。

一木 131.0 一木神社の裏、四等。お祭りの祈願の儀式、拝殿に希有の美女、宇佐神宮から来られた女官司、独身と聞く。しばし神様に見とれた。まさしく有終の美。感謝!!(お神楽見たし、六〇〇、支部報の製本作業あり)独り。

(後記)  
野津原神社付近、御茶屋があつて、四国艦隊との交渉のため、佐賀閣から長崎往復の旅路、勝海舟と坂本龍馬が宿泊したらしい。

警察学校の池、繁見山あり。太田地区に中世、繁見城があつたらしい。永富三兄弟の石垣原戦、覚悟の逆襲塔三基が四四二号沿いにあるという。確かに、やぶの中、見捨てられた塔、墓石、石仏像など地元のひとつさえ知らぬ史跡を見た。愛宕山、整備出来ないものか。(参考)「豊後大友四〇〇年の風

景」加藤貞広、牧 達夫(大分古

国府歴史文化研究会)(注)四一  
号の「平原(らまこ)」はN氏が大  
掃除、四等が姿を見せ、二度目の  
訪問。地点は違っていたいなかった。  
二人には労力不足反省。

### 私の無名山ガイドブック34

飯田 勝之

## 里山の稜線歩き

(その5)

今回は国東の里山稜線を紹介しよう。昔は秘境とうたわれた国東は、今では道路も整備され、六郷満山の仏教文化を中心とした観光地としてのにぎわいも見せている。秘境といわれても国東は、里の人々の暮らしが隅々までしみこみ、全域が里山と言つても過言ではない。

昭和三二年七月一日(初版)の「九州の山」には、国東の山々を「さしたる原生林もなく魅力ある登山地ではないが、歴史や伝承を聞き、新緑から紅葉の峠路を越え、独特の文化遺跡を廻るのに無限の興味の湧くところである」と紹介されている。

谷深くから稜線付近まで植林が入り込み、険阻な地形にも幾度となく斧が入り、薪炭林として伐採

されてきたため、自然林でも極相林まで復元しているところは少ない。しかしまた、かつては炭焼きのための林であったところが、近年はすっかり自然の姿を取り戻し、ほどよい照葉樹林となっているところも多い。今回は西国東の里山稜線を二つ歩いてみよう。

## 久保(204.7m)

豊後高田市真玉の堅来川をさかのぼると、最源流にあたる場所に上小畑がある。この集落の入り口にさらに源流方向に向かって上る新しい林道がある。「ふるさと林道小畑・山畑線」と書かれた標識の見えるこの道は、深閑とした寒村には不釣り合いなほど立派だ。山間部にはこのような、通る車の少ない林道がいたる所に開かれている。

林道は緩くカーブしながら登っていくと、一キロほどでオープンカットの峠に達する。右側(西)斜面にコンクリート舗装の細い道が斜めに、オープンカットの切り羽の斜面を上っている。

ここが今回の稜線歩きの入り口だ。まっすぐ登ったあと、緩く二回曲がって林道から三分ほどで小さな社の前に着く。「小畑稲荷」だ。稲荷社の後ろは稜線で、社の脇を通り稜線を右(西)に向かうと、すぐにハチクの混じった雑木林となる。ちよつとゆるさいだけのヤブを分けて進むと、すぐに心地よい照葉樹の中の稜線道となる。



参考タイム：林道峠く五分く小畑  
稲荷く三〇分く久保三等三角点

## 前田(166.6m)

この三角点の稜線は、大岩屋と上城前との間にある、台地状の丘陵の一角にあたる。県道六五四を真玉から東進すると、真玉温泉を過ぎて約六〇〇mで、北の応寺の方に入る道が分かれる。

この県道三叉路の北側の道路擁壁につけられた、小さなコンクリート道を入り口とする。擁壁の上端を伝うと古い小さな山道が北の林内に入っている。これを行くと突然、古い石仏と石塔の並んだ小広場に出くわす。石仏に手を合わせてその奥へと進むと、古い道はややあやしくなりながら続き、緩やかな斜面の林の中を曲がりくねりながら間もなく判然としなくなる。

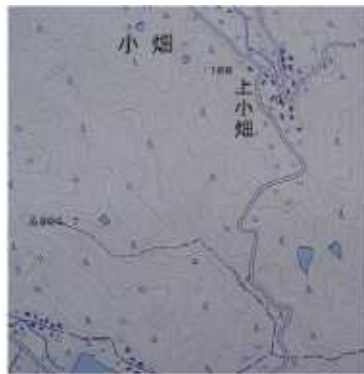
はじめはヒノキ、ナラ、クヌギ、ツバキ、ネズミモチなどの混交林だが、やがては古い二次林となりカシ、シイ、タブなどの照葉樹林の中となる。豊かな照葉樹の林はブッシュなどはなく、何処を歩いても楽しい。秋のキノコ採りなどにはもってこいだらう。

しかし、ずっと緩やかな広い斜面なので、登りは上を目ざせばよいが、帰りには方向を誤ると何処に下りつくか分からない。自分の目印が必要だ。

約30分で広い平らな台地状のところに着き、その真ん中あたり

に四等三角点がある。  
ここまではこの稜線の始まりで、照葉樹の林はその奥へずっと続いている。ほおじろの鳴き声が里近しい山のどかきを感じさせる。

参考タイム：県道く五分く石塔く五分く前田三角点



## お知らせ

### 八月月例山行のご案内

- ・ 八月二四日(日)
- ・ 目的地：800521.7m 熊群山・804.6m(由布市庄内町)、白山・809.6m(由布市湯布院町)
- ・ 出 発：八月二四日(日)午前五時サニ一出発

### 九月月例山行のご案内

- ・ 月 日：九月二〇日(土)
- ・ 目的地：900521.7m 前門岳・941.6m(福岡県星野村)
- ・ 出 発：九月二〇日(土)午前五時サニ一出発
- ・ 参加者と話し合せて、一泊し、翌日は付近の山を登ることも考えています。

### 十月月例山行のご案内

- ・ 月 日：一〇月二六日(日)
- ・ 目的地：1000521.7m 高嶺山・1006m(日田市前津江町)、ヒタキ・1016m(日田市前津江町)殿尾・1014.8m(日田市中津江町)
- ・ 出 発：一〇月二六日(日)午前五時サニ一出発

### 十一月月例山行のご案内

- ・ 十一月十五日(土)
- ・ 目的地：1100521.7m 高千穂野・101.6m(熊本県山都町)、鞍岳・118.36m(熊本県菊池市)
- ・ 出 発：十一月十五日(土)午前五時サニ一出発

※ 月例山行の日程は土曜日

の方が参加しやすいという声も聞かれますので、今年度は試しに、土曜日を半分組み入れてみることにしました。

## 事務局よりお知らせ

## 役員会開催のお知らせ

・ 日時 八月二〇日(水) 午後六時より

- ・ 場所 「コンパルホール」
- ・ 議題 五〇周年記念事業
- ※ 五十周年事業計画の概略を決める大事な会議ですので、役員は必ず出席して下さい。

## 支部創立五〇周年事業実行委員会について

東九州支部創立五〇周年を平成二二年(二〇一〇年)に迎えるにあたり、記念事業を実施するための実行委員会を設置することが、二〇年度定例総会で決まりました。これを受けて、役員会で実行委員会の設置と構成を検討し、別紙の通り全ての会員、会友が実行委員会の何らかの任務を分担し、事業の遂行にあたることを望ましいとしたりえで、**全員の任務分担**を振り分けしました。

各会員、会友におかれては、任務分担等に特に意義等があり、変更の希望がある場合は、事務局まで申し出て下さい。  
**任務分担表**は巻末の別紙の通りです。

## 第二十四回全国支部懇談会について

○日時 平成二十年十月十一日(土)く十二日(日)

○場所 北九州市小倉北区古船場 三十四六「ホテルニュータワー」  
TEL: 093-521-7000

○日程

一日目 (十月十一日)  
受付 一四:〇〇  
開会 一五:〇〇  
講演 一五:三〇〜一七:〇〇  
講師 梅光学園大学教授 小林 慎也

懇親会 一八:〇〇〜二〇:〇〇  
二日目 (十月十二日)  
記念行事

- ・ 福知山登山 所要時間 約七時間
- ・ 平尾台く貫山登山 所要時間 約七時間
- ・ 関門の歴史探訪コース(貸し切りバス)所要時間約七時間、コース(下関市長府の城下町、攻山寺(国定)、赤間神宮、火の山、壇ノ浦、和布刈、関門人道トンネル、下関・風師山

・植有恒元会長の歌碑見学  
○費用 二日間 二〇,〇〇〇  
円(懇親会、宿泊、記念行事、  
弁当、バス代等)、懇親会のみ  
六,〇〇〇円、記念行事のみ  
三,〇〇〇円

○締め切り 平成二〇年八月一  
五日まで(東九州支部事務局・  
TEL097-532-0925まで)

※ 同じ九州の支部の主催ですの  
でござって参加しましょう。

## 第十五回視聴覚障 害者支援登山大会

これまで府内山岳会が積極的に  
取り組んできましたが、ことしか  
ら、日本山岳会東九州支部の公益  
的行事として、共同開催すること  
になりました。皆さん積極的に参  
加しましょう。

・日時 平成二十年十月二十六日  
(第四日曜日)

・場所 宇曾山(六四四巨)(大分市  
野津原)

・集合場所 のびゆく丘駐車場  
(建物なし・駐車場のみ)

・日程  
八・五〇 駐車場集合  
九・〇〇 開会式・出発

一〇・〇〇 山頂到着(昼食)  
一一・〇〇 山頂出発

一四・三〇 駐車場到着・閉会

※ 連絡先及び参加申し込み:佐  
藤善則会員(TEL:〇九七一五

六八二〇一五)一〇月二〇日  
までに申し込んで下さい。

## 「第六三回国民体 育大会」 「第八回全国障害 者スポーツ大会」 に協力しよう

第六三回国民体育大会「チャ  
レンジ!おおいだ国体」が九月二  
七日(土)から一〇月七日(火)  
開催されます。大分県において二  
度目の開催となるこの大会は、  
「おもてなしの心のこもった大  
会」「人と環境にやさしい大会」  
「簡素な中にも夢と感動にあふれ  
る大会」「手づくり選手の活躍に  
よる天皇杯の獲得」の四つの目標  
を掲げ、県民総参加をテーマにし  
ています。

また、一〇月一日(土)から  
一三日(月)まで、「第八回全国  
障害者スポーツ大会」が開催され  
ます。全国障害者スポーツ大会は  
「全国身体障害者スポーツ大会」  
と「全国的障害者スポーツ大会」  
を統合し、平成一三年に第一  
回大会が宮城県にて開催されまし  
た。以降、毎年国民体育大会開催  
都道府県で開催しています。

会員や会友もたくさん両大会成  
功のために頑張っています。会員  
・会友のみなさんの協力をお願い

※ 事務局連絡は一〇月一四  
日より四〇日間は、月例山行  
は飯田まで、他は加藤までに  
お願いします。

## 後記

○ 数年前、私の大分百山最後の  
山は、アケボノツツジの木山内  
岳。そのきつき、桑原山縦走と  
か、七年山とか、それはもう夢  
の登山路

○ 先日初めて、大明神越から東  
の宇都尾木(三等・九九四m)  
を往復し、縦走路に戻って一〇  
八八mまで行ってみた。傾山ま  
は行く気はなかった。

○ 人の登山記録を読むのが楽し  
い。見立く頭巾岳、日隠山など  
誰か登山記録を読ませて下さい。  
(安部)

○ 編集作業も大詰め。暑い午後  
の日射しが窓の外。アブラ蟬の  
声がいっそう暑さを呼ぶ。二階  
の窓から見る隣の庭の赤いキョ  
ウチクトウ。「そうだ。この赤  
さだ」

○ 梅雨の間はウノハナやヤブデ  
マリ、ガマズミ、クマノミズギ  
ヤマボウシなど、白い花ばかり  
が山道を彩っていました。

○ じりじりと真夏の太陽が情け

容赦なく照りつけるようになる  
と、白い花々に代わり、ネムの  
花をはじめ、キョウチクトウや  
サルズベリ、カンナ、ホウセン  
カ、サルビア、ケイトウなどな  
ど・・・、炎天下に何故かしら  
似つかわしい?赤い花々。これ  
も季節感・・・。

○ ネムと言えど思い出すのは  
「象潟や雨に西施がねぶの花」  
有名な芭蕉の句。ケイトウでは  
「鶏頭の十四五本もありぬべし」  
子規。ところが、歳時記ではケ  
イトウ、カンナ、ホウセンカは  
秋の季語となっていました。  
(K・I)

「ニニは何処?」  
この写真は何処から何  
を撮ったものでしょう?



○ お分かりの方は事務局まで  
はがきでお知らせ下さい。当  
った方には記念品をさし上げま  
す。(二名までで、正解多数の  
場合は抽選します。)

○ 締め切り八月三十一日  
前回の正解は愛媛大小屋から  
見た石鎚山の北壁を撮ったもの  
でした

## 日本山岳会東九州支部報 第42号

2008年(平成20年)7月25日(金)

発行者 梅木秀徳

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-20

サニースポーツ内 西孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八